

受刑者にチャンスを

一般社団法人「碧の森」代表理事 湯浅静香さん（四五歳）

「依存症子」を名乗り、「好き放題を続けていたら受刑者になりました」というブログを書き続けている。洋服の万引きがやめられず、懲役一年一ヵ月の実刑判決を言い渡されたのは三五歳のときだった。

両親とともにギャンブル好きで、小学生のころからパチンコ店につれて行かれた。料理も掃除も一切しない母からは虐待を受け、父からは過剰に甘やかされる「機能不全家族」に育った。高校二年のころ、「やせる薬」と言われ覚醒剤を試した。薬代は援助交際で稼いだお金で払った。高校を卒業後はキャバクラに勤め、やがてナンバーに。だが昼夜逆転の生活で眠れず、睡眠薬や向精神薬に依存するようになった。ギャンブルや買い物、整形にも依存した。

薬物の影響で言動が支離滅裂となり、かつてのように稼げなくなった三〇歳のとき、客の一人だった夫と結婚。堅い職業に就く夫には三千万円近く貢がせていた。「結婚詐欺だと訴えられかねない」と自らプロポーズした。

夜の仕事をやめ、望んで専業主婦になった。でも、毎日がつまらなかった。スリルを求めて万引きを繰り返し、向精神薬を過剰摂取する日々。二度目の逮捕のときに、簡易精神鑑定で「依存症」だと診断された。

「万引きも薬も病気だったんだ」。生きづらさの理由がわかり、ホッとして涙が出た。「依

存症は完治しないが、回復する」という言葉に希望も感じた。だが執行猶予がついた二週間後に再び万引きでつかまり、実刑判決を受けた。

拘留所や刑務所には、自分と似た境遇の再犯者がたくさんいた。「二度とここに戻らないためには何が必要か」を考え続け、依存症関連の本を読みあさった。夫には何度も謝罪の手紙を出したが、一度も面会に来なかった。

仮釈放後、自分と同じ悩みを抱える人の役に立てばと、自らの生い立ちをつづるブログを始めた。少しずつ、我が子の依存症や前科に悩む親から切実な相談が寄せられるようになり、気づいた。社会からの孤立が、彼らの回復や更生を妨げているのではないかと。

四年前、当事者や家族の相談に乗る「繋の森」を立ち上げた。キャリアアコンサルタントの資格も取り、二年前からは社会福祉士と精神保健福祉士の資格を取るため通信制大学にも通う。

「刑期を終えればすべてが許されるとは思いません。でも社会と共存しようとしている元受刑者もいる。だから私たちにチャンスを下さい」。日本の再犯率は五〇％近くで横ばいだ。

仮釈放から九年、夫婦の関係も変わった。夫は今、妻の最大の理解者だ。

「碧の森」を始めるきっかけは。

出所後、何もすることがなくて暇で、たばこやゲームに依存しかけた。このままではまずいとネイルの学校に通い始めたのですが、その先生が女性の起業も支援していて。ある日「私は元受刑者で、自分のような人を何とか助けたいと思っている」と打ち明けた。

実は刑務所の中にいるときから「刑務所の教育はおかしい」と漠然と思っていました。たとえば私の罪は窃盗ですが、その背後には薬物依存症があり、それがクレプトマニア（病的窃盗）につながりました。それなのに、何の教育も受けられませんでした。

ネイル学校の先生に、突然こんなことを言ったら引かれるかなと思っていたら「やりなよ！」と背中を押され、拍子抜けしました。

この仕事を一生

実名で顔を出して活動することに抵抗はありませんか。

碧の森を立ち上げたとき、「この仕事を一生やる」と覚悟を決めました。相談業を始めるのに本名を明かさなかったら、肩頼性がありませんよね。

でも、親のせいではないと認められ子どもがいらないからできる活動だとも思います。私はきつと虐待してしまいうから、子どもは産まないと決めています。

更生に一番必要なのは『希望』

実際に相談を始めて感じることは

メールも含めるとこれまで三〇〇人ほどの相談に乗りました。当事者は、自分が依存症だとは気づきませんから、九割以上が家族からの相談です。

ご家族からは「子どもを助けようとする私の行動は、共依存でしょうか」という相談が多いです。私自身も母と、かつては夫とも共依存の関係でした。

私の一度目の逮捕のとき、罰金刑となり夫が五〇万円を払いました。ただ、本当に私に更生して欲しいのなら払うべきではなかったと今では思います。夫は検事から「奥さんを刑務所に行かせたいんですか」と言われたそうです。私個人の問題なのに、家族を巻き込むような司法のやり方は問題だと感じます。

「前科者座談会」も定期的に開催していますね。

出所後の悩みを共有する場としてオンラインで開催していて、四〇回近くになります。

地元に戻ったけど周りの目が気になる、新しくできた友達に前科を打ち明けた方がいいのか。こうした悩みを前科のない人に打ち明けても、なかなか理解してもらえません。私は仮釈放の少し前から過敏性腸症候群に悩まされまし

た。地元の大宮に戻ったのですが、かつてのお客さんに出くわす恐怖に加え、薬物の副作用で当時の記憶がなく、自分が何をしたのかわからないという恐怖もありました。高校の同級生に打ち明けたら、LINEをブロックされたこともあります。

**全部私のことが
湯浅さんはなぜ生き方
を変えられたのですよ。**

立川拘置所で、公認心理師の信田さよ子さんが着いた本「依存症」を読み驚きました。親からの虐待や機能不全家族、依存のメカニズムなど「全部私のことが書いてある」と。大事な部分をノートに書き出して、何度も読み返しました。よい刑務官に恵まれたことも大きいです。厳しい方でしたがある日「あなたたちはここで守られているの。あなたの家族の方がもつとつらい思いをしている。それを理解しないと、またここに戻るからね」と言われて。重い言葉でした。

妻が逮捕されたことは、夫の仕事に影響しなかったのでしょうか。

夫は妻のことを職場で話すタイプではなかったことが幸いしました。ただ結婚後に私がつくった借金が一千万円近

くあり、その返済に迫られました。

私は自分が依存症であること、出所したら治療を受けたいことを毎回、手紙につづったのですが、返事は「まだそんなことを言っているのですか」と一、二行来るだけ。向精神薬を処方し続けた精神科への不信感が強く、好き手に生きてきた私への怒りでいっぱいでした。

それでも夫は「離婚はいつでもできる」と、仮釈放日に迎えに来てくれました。ただ、一度でも依存行動に戻ったら、即離婚すると言いつづけています。

いま「生きててよかった」と思う瞬間は

夫が笑ったときと、相談者の方に「会えてよかった」と言ってもらえたときです。

夫と冗談が言い合えるようになったのが四年前、夫がたくさん笑顔を見せるようになったのは二年前ぐらいです。私の活動も中立的な立場で見守ってくれて、かけがえのない存在です。

相談者の方には経験だけでなく専門知識も踏まえてアドバイスをしますが、その言葉で生きやすくなることもある。支援ではなく、伴走するイメージです。

そしていつか、刑務所でしっかり教育に携わりたいです。私の姿をみて「こういう人がいるなら、私もやれるかも」と思う人がいるはず。更生に一番必要なのは「希望」だと思います。

文・岡崎明子